

## 森林と環境－森林立地論－への道

### 研究の方針

本州の人工林、いわば平均値の林から、北海道の雑木林へやって来て、その違いに「意を得たり」という思いと未知の世界への期待がふくらんだ。ゼミのたびに次元解析と数式の誘導に取り組んだときに感じた「平均値の科学への疑問」は、個々の木が価値を持つ北海道での仕事に取り組む中で「霧」が晴れつつあった。例えば「タネの発芽率は〇〇%」と表記するが、個々のタネは発芽するかしらないか、である。

上司らは、私の好みの植物生理生態学のテキストの輪読や日々の議論を通じて指導下さったが、前会長の高橋邦秀氏が所蔵されていた原田泰の「森林と環境－森林立地論－」をお借りしたときに、確かな指導者を得た思いであった。既に1939年には天然更新に関連して光質と発芽、稚樹の成長の研究を原田氏はまとめておられた。私は学生時代にヒノキの天然分布が何によって規定されているか？という疑問から光質や受容体であるフィトクロムに関心を持った。林業試験場では、キセノンランプを利用して光質ごとに育成できる施設を利用した研究がはじまっており、真に憧れの職場であった。そのような研究が北海道では40年以上前に実施され実用化を目指していた。一連の研究の集大成は「林学領域ニ於ケル陽光問題ト是ニ関係スルニ・三の環境因子ニ関スル研究並ニ育林上ノ処置ニ就テ」という博士論文であった。被陰処理を利用した耐陰性の研究も今でも追いつかない水準である。直達光と散光成分を分けて更新稚樹への影響を（手回し計算機で）定量化していた。職場は違ったが、1998年に再び北海道へ赴任して、迷わず指針として手にしたのは「森林と環境－森林立地論－」であった。今も、彼の時代にできなかったこと、（恐らく）気づけなかったことは何かと考えて実験を計画している。

### 造林学への道

2006年に造林学を講じることになって、1981年以来考えていたことを実行に移す機会を得た思いであった。原田氏の目指した天然林からの「略奪林業から育成林業へ」こそ、生理学志向の私には心強い言葉である。そして開道時代においてすら「自然をいかに残すか、森林をどのように再生するか」という言葉を残された初代・新島善直氏の思いをどのように講じていくのか、今も模索中である。その答えの1つが、「変動環境下における持続的森林管理」である。原田氏の「森林と環境」は、カルフォルニア(UC)大学のベイカーの *Principal of Silviculture* の影響を少なからず受けている。米東海岸の森林は北海道中央部のそれに酷似するにもかかわらず、9版を重ねた哲学的な名著 *Practices of Silviculture* を、なぜ、あまり採用していないのか。私は原田氏の目指す森づくりへの思想が、ベイカーのそれに近いと理解している。それは1990年、彼の後任、ヘルムズを訪ねたときに見たUCバクレー校の学部長の部屋にあったレリーフの「河川を含む森林生態系」に示されていた。カルフォルニアに広がる針葉樹 *Red woods* の人工林を思い浮かべていただきたい。生理学を基礎に、体系だった針葉樹林育成の管理と経営を志向し、一方では新島氏の唱えた目標を、御料林を舞台に展開されたのではないか。その考えは「森林と環境」に込められていると感じる。森づくりは国家百年の大計である。おこがましいが、原田泰氏の研究から一步でも進めたい。

### 北方林業

ようやく就職できた林業試験場の自らの机の上に置かれていた「北方林業」は、学生時代に図書館へ購入要求を出した雑誌であった。「一般の林業関係者向けに」、という上司の言葉が重すぎると感じた。ただ、憧れてきた研究員の仕事の厳しさを毎回感じさせる雑誌は、かけがえのない存在である。2度目の赴任地になった北海道で、本誌の編集に携わって15年も経ったが、投稿者になったとたんに技術者としての未熟さを感じさせる大きな壁が、原田泰氏の創刊による本誌である。